

相廣橋左大辨宰相殿上人八人、公連朝臣、爲國朝臣、雅壽朝臣、光宙、大江俊常子、丹波賴永、源常保等也、各包物持參、如形開之喰了、直自下臈退入、此時有出御、女房出座如例、議奏各出座也、入御之後、公卿以下再參候、御盃之儀如例、初獻巡流、二獻俊常取酌子、酌二獻小掛、三獻酌俊常加子、肴賴永常保昇之、萬事如例了、未半刻頃各退出了、

〔憲法類編 二十三〕嘉祥米并玄猪御祝ノ事

第三百廿一 戊辰○明治元年六月三日

來ル十六日嘉祥ニ付、從當年嘉祥米被下候間、來ル十二日十三日巳刻ヨリ未刻迄、會計官へ申出可有之候事、但他國在勤之向へハ不被下候事、

第三百廿二 己巳○明治二年六月 日辨事達

今後嘉祥米、官中之輩へハ不被下候間、此段爲心得相達候事、

幕府嘉祥

〔武德編年集成 四十四〕慶長三年六月十六日、夜ニ入嘉祥ノ祝アリ、秀吉ハ上段櫛ノ上ニ蒲團ヲ布

テ著座、秀賴其傍ニ侍座セラル、其下段中央ニ片木ニ色々ノ菓子ヲ積ンデ並べ置、此席へハ中老五奉行、近習ノミ出座シテ是ヲ頂戴ス、其餘每席如是ノ品々ノ菓子積ミ置、官職ノ高下ニ依テ其席ヲ異ニシ、皆菓子ヲ得テ退クコト恒例ノ如シ、秀吉、中老奉行ニ向テ曰、吾願フ處ハ、秀賴十五歳ニ及バ、海内ノ政ヲ讓ント欲スルコト日アリ、渠天下ヲ管領シ、此嘉儀ヲ成スコトヲ見バ、吾本懷タラン、吾命既ニ以竭ントス、遺恨少ナカラズトテ落涙アリ、伺候ノ輩涕泣シテ退ク、

〔幕朝故事談〕諸侯 御嘉定の御菓子十六色なり、一品宛へぎ板に載て、御前に並置なり、御嘉定の御祝儀申上候て、御老中方、大暑の節故、入御被遊寛々頂戴可仕旨被仰渡、御簾なり、四品以上は三人宛進て頂戴、帝鑑の間衆は五人宛進て頂戴す、布衣以上の御役人迄なり、其以前に中興御小姓衆、御給仕の習禮あり、進物番の習禮あり、其後初て出勤の大名、習禮稽古す、